ることを感じた。私は復た前に餘儀なく逃げて出たと同じ痛ましい境遇に立ち還つた。而もそれが何人の罪であるとも云へなかつた。固よりクルチイユは惡黨でないから、厭な顏もせず、喜んで私を迎へたやうである。併し、以前私は彼女の一切であり、彼女はいつまでも私の一切でありながら、その人の傍で、どうして私が餘計な人間となつてゐるに堪へられようぞ。實の子であつた家の中で、どうして他人として暮らされようぞ。昔の私の幸福の證人である事物を見ると、對照が餘計殘酷に感ぜられた。他の家なら、これ程苦しみはしなかつたであらう。併し、こんなに澤山な樂しい追憶が、引つ切なしに思ひ出される自分を見ることは、自分の喪失の感をそそるばかりであつた。徒らな悔恨に襲れ、殊に暗い憂鬱に沈んだ私は、食事時の外は獨り法師で居る習慣に戻つた。書物と一緒に室に閉ぢ籠もつて、そこに便利な氣晴らしを求めた。同時に、これまで隨分心配した家計の危急を感じたので、母が財源に窮した時の備へをする爲に、又々心を碎いで自分一人でその方法を考へた。さきに私は甚い落日にならないやうに家事を整理して置いたのに、それがその後すつかり變つて了つた。彼女の會計係は浪費者だつた。立派な馬に立派な車と、彼は派手を好んだ。附近の人に上品らしく見せびらかさうとした。何も分らない癖に始終計畫してゐた。年金は前以て喰ひ込んで了ひ、四季拂は抵當に這入り、家賃は滯り勝ちで、借金は殖える一方だつた。私は此の年金が程なく差押へられて、終に停止されはしないかと思つた。詰り私は破滅と災害とをのみつく〴〵見詰めたのである。而もその時機が如何にも迫つてゐるやうに思はれて、早くも一切の恐怖を感じてゐた。

私の親しい書齋は私の唯一の慰藉であつた。私が此の室の中で、頻りに自分の心の苦惱を紛らさうとしてゐたお蔭で、やはり此處で、今目に見えて居る災難を救ふ手段を求め出す氣になつた。そして昔の考に歸つて、又しても空中樓閣を描いた。可憐な母の今まさに陷らうとしてゐる痛ましい窮境から彼女を救ひ出す爲である。私は文壇で時めかして、それで幸運を作るほどに、知識も才分もあるとは思つてゐなかつた。偶と浮かんだ或る新しい考が、自分の凡才の爲に得られなかつた自信を吹き込んでくれた。私は音樂の教授は廢めても、音樂を放つて了つたのではなかつた。却つて少くともその理論方面の學者を以て自任し得るだけに、その方の事を研究してゐたのだ。樂譜の讀み方を學ぶ上にいつも自分の經驗した困難、又今でも本を開けてすぐに唱ふのに感ずる困難を思ひ廻して、遂にその原因が、自分にもあると同時に、樂譜その物にもあるのだと考へ附いた。固より音樂を學ぶのは、誰に取つてもやさしいことでないとは知つてゐたのだ。私は音符の組織を調べてみて、その考案の面白からぬ事を見出した。私が數字を音符の代りに用ひて、極く短い唄を譜に取るにも、何時も五線を引く面倒を除かうとしたのは、昨今の事ではなかつた。唯オクタアヴ、拍子、歴時の現し方に窮してゐたのである。此の舊案が又しても頭を擡げて來た。そしてよく考へてみて、然うした困難も强ち打ち克たれないものでもないといふことを知つた。私は首尾好くそれを考へつけた。どんな樂譜でも極く簡便に私の數字で書き取れるやうになつた。此の瞬間から私はもう幸運が成就したものと思つた。何もかもこの人の恩であるその母にも、それを分配したいといふ熱望の裡に、私は巴里へ出掛けることしか考へなかつた。此

の新案をアカデミイに提出すれば、大波瀾を惹起すに違ひないと思つたのである。里昂から持つて歸つた金が幾らかある。書物も賣つた。二週間の中に私の決心が極まつて實行となつた。斯うして私はいつもの癖の、この決心を吹き込んだ華々しい考を抱いて、丁度昔エロンの噴水器を提げてトリノを立つたやうに、私の記憶法を提げてサヴワを立つた。

私の青年期の錯誤と過失とは以上の如くであつた。私はその歴史を、心の滿足する程忠實に物語つた。此の後私が若干の德行で壯年時代を飾ることがあつても、亦同じく率直にそれを話さう。而もそれが私の計畫であつた。併し、私は玆で中止しなくてはならない。時は能く面帕(ヴェール)を捲り上げる。若しも私といふものの記憶が後代に殘るならば、いつか人々は私の言はうとしたことを知るに違ひない。その時、私が何故沈默したかを知るだらう。

目次

第一部

第一卷　一七一二年—一七二八年【誕生—十六歳】……一五

一七一二年ジャン・ジャアク・ルソオ、ジュネエヴに時計師の子として生る——母ルソオの產後に歿す——父ルソオを養育し、七歳より小說を讀むに委す——讀書に耽りて屢々宵を徹することあり、夙に萌せる想像力を促進す——父、人と爭ひてジュネエヴを去る——ルソオ小父に託せられ、ポセの宣教師ランベルシエの塾生となり、植物及び田園の風光を愛す——少女ヴュルソン及びゴトンと親しむ——ジュネエヴに歸りて後、公證人マスロン、彫刻師ヂュコマンの家に入る——毆打を蒙り、又竊盜を試む——讀書に溺れ、衣服を賣りて書籍を借る——散步の歸途偶々市の城門の鎖さるるに會ひ、且撲たれんことを恐れて遠くジュネエヴを逃走す

第二卷　一七二八年【十六歳】……七三

ルソオ數日間漂泊す——一僧之を救ひて加特力教に改宗せしめんとし、アヌシなる一

改宗者ヴァラン夫人に紹介す――夫人之を好遇す――トリノの學林に送らる――四箇月にして加特力信者となり、八圓を衣兒にして學林を出づ――トリノの街頭に彷徨す――一商人の婦バジル夫人之を好遇す――ルソオ此の女を戀ひ、その夫に逐はる――次いでヴェルセリ伯爵老夫人の僕となる――此の邸にてリボンを竊み、却つて少婢を誣ひ、二人俱に逐はる

第三卷　一七二九年―一七三〇年【十七歳―十八歳】……一三一

官能の發動――深くサヴワの學僧ゲエムに感化せらる――グヴォン伯爵の家僕となる――怜悧を以て知らる――主人彼を敎へて有用の材たらしめんとす、ルソオ同好の小年バアクルに誘はれて漂然此の家を出づ――亞爾伯旅行の快――ヴァラン夫人の許に歸り、製藥又は企業の事に與かる――庇護者等彼を村里の司祭たらしめんとす、乃ち二箇月の間神學校に學ぶ――學僧ガチエの感化を得たる外は唯音樂に耽るのみ――ル・メエトルの門に入りて音樂を修む――漂泊の音樂家ヴァンチュウルに傾倒す――ル・メエトルに隨ひて里昂に走る――病に苦しめる其の師を路上に遺棄してアヌシに還る――ヴァラン夫人と相遇ふことを得ず

第四卷　一七三一年―一七三二年【十九歳―二十歳】……一九三

暫くアヌシに在り――ガレ、グラフェンリイドの二少女と快遊す――ヴァラン夫人の

伴婢に伴なひ、ジュネエヴ、ニヨンを經てフリブウルに入る――ニヨンにて父に再會す――ロザヌにて樂師たらんとし、却つて嘲侮を買ふ――ジュネエヴ湖上の景を溺愛す――ヌシャテルにて東方の托鉢僧に誘はれ、その通譯となる――イエルサレムへの途上ソルウルにて抑留せられ、端なくこゝに庇護者を得――巴里に出でんことを願ひて許さる――初めて巴里を看る――大佐ゴダアルとの關係――里昂に於ける不快事と快事――ヴァラン夫人のシャンベリに在ることを知り、會心の旅行の末遂に相見ることを得――夫人の斡旋に由りて土地調査局の屬吏となる

第五卷　一七三二年―一七三六年【二十歳―二十四歳】……二五五

クロオド・アネ及びヴァラン夫人とルソオとの關係――諸種の原因より佛蘭西を熱愛するに至る――ラモオ研究――屬吏の生活を厭ふ――音樂を愛して定業を廢す――婦女の彼に音樂を學ぶ者多し――是に由りてヴァラン夫人意平かなること能はず、一種の詭辯を試みてルソオの愛を專らにせんとす――事成りて二人の新關係を生ず――夫人彼に立身の方途を授けんとして徒勞に終る――生活の急と企業の欲とに驅られ、夫人、王室植物園をシャンベリに設置し、アネをして此に敎官たらしめんとす――アネの死後夫人の家道衰ふ、ルソオ焦慮すれども效無し――ブザンソン、ニヨン、ジュネエヴ、里昂等に往來す――諸交友――ヴォルテエルの文に心醉す――ルソオ健康を害

8443

す――夫人と倶にシャンペリの近郊レ・シャルメットに移り住む

第六卷　一七三六年――一七四一年【二十四歳――二十九歳】……三三四

シャルメットに於ける生活――自然の享樂と學術の習得と――自ら心臟息肉に冒さると疑ひ、醫療を求めんとてモンペリエに旅行す――途上ラルナアジュ夫人と刹那の逸樂に耽る――夫人との密約を破棄す――ヴァラン夫人、別に情人ヴィンツェンリイドをその家に留む――ルソオに對する夫人の愛義ふ――ルソオ快からず、去りて里昂に往き、家庭教師となりてマブリの家に入る――教師として失敗す――一年にして再びシャルメットに歸る――心依然平かならず――自家案出の數字に依る樂譜記法を携へ、アカデミイの名譽を獲んとして巴里に向ふ

懺悔錄　上卷

定價六拾圓

昭和五年十二月廿五日　第一刷發行
昭和十四年四月廿日　第十三刷改版發行
昭和廿二年十一月一日　印刷
昭和廿二年十一月五日　第十五刷發行

譯者　石川戲庵

發行者　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地　岩波雄二郎

印刷者　東京都西多摩郡霞村根ケ布三八五番地　山田一雄

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　岩波書店　會員番號A一〇九〇〇四號

配給元　東京都千代田區神田淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

製本・印刷　堂化大社會式株

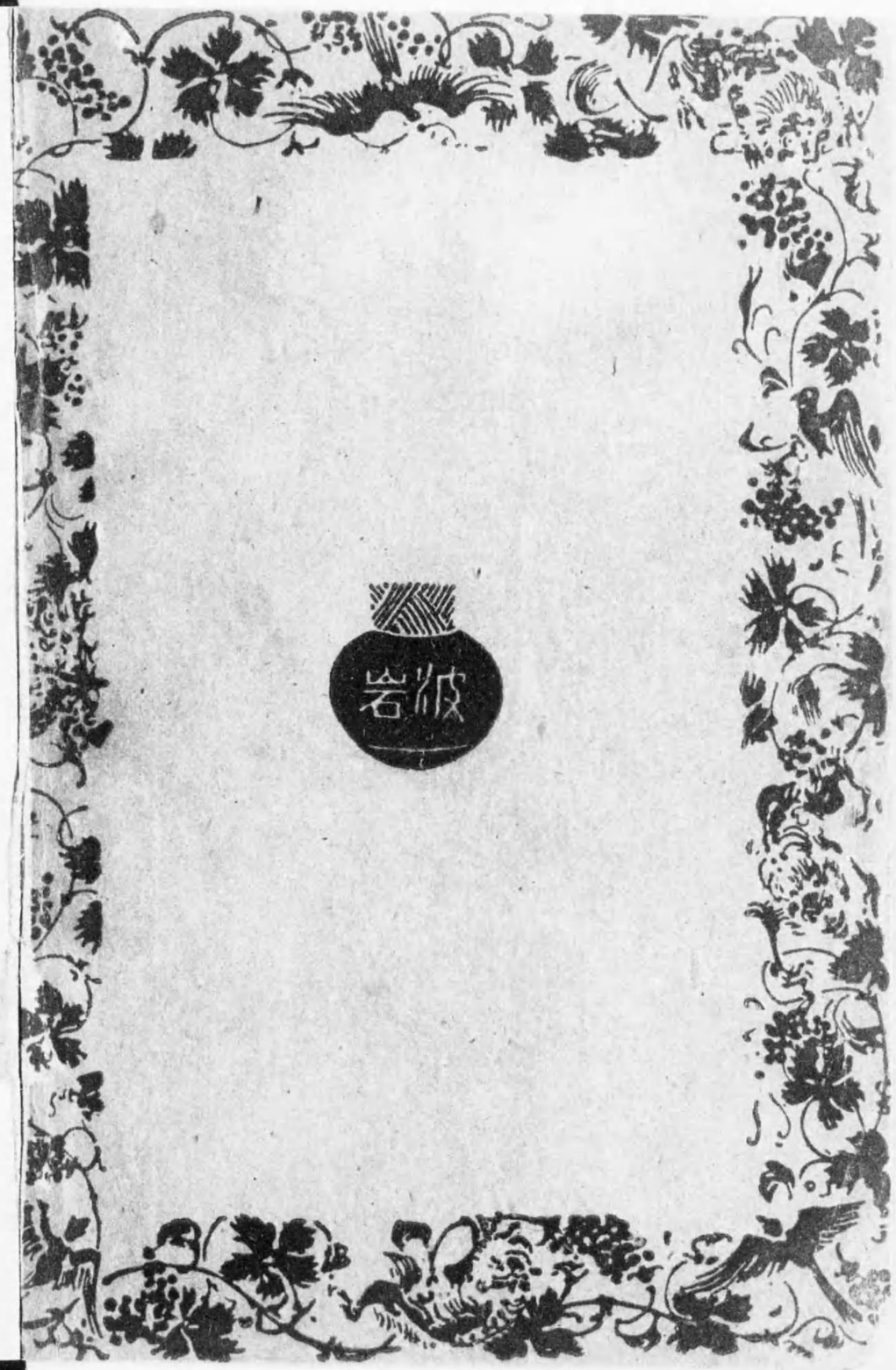
讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生產豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月


岩波

135.48
R76
31(1)

終